

ていれば、まずは安泰と考えるのです。夢がなくなり、人間らしさがなくなります。学生は、こうなっ
てはいけない。夢を持たなければいけない。自分の
時間の中で、自分を失見なわないようにできる余裕
が学生にはあります。

結局、会社員とは何なのか、私にはわかりません。
ただ、自分の理想が仕事として生かせれば、こんな
に幸せなことはないと思いつながら、それができない
ところが社会の厳しさなのかナと思います。

<最後にひとこと>

社会に出ると、“あなたは大学で何をやってきた
のか”、“総合科学部とは何か”という質問をよく
されます。何をやってきたかを言っても、学部の説

明は難しいものです。外部から見ていると、もう、
新しい学部を造るという理想をあきらめてしまっ
たかのように見えます。卒業生のひとりとして、自分
の卒業した学部を、正しく説明できないほど悲しい
ことはないでしょう。みなさん、がんばって下さい
ヨ。

しょうもないことを書いてきましたが、何かの参
考になれば幸いです。……なに……参考にもならな
い?……それはどうも失礼致しました。

<追伸>

関西地区二期生同窓会は、六甲山ハイキング、コ
ンパ……と、いろいろ、がんばっております。

53年度 環境科学卒業 広瀬浩一



教育実習について

「きみたちは、これまで教えられる立場で学んで
きたのだが、教育実習では、教える立場から学んで
きてほしい」ということを実習を前にしたオリエン
テーションで私は話した。

教育実習の参加者は年々増えてきて、4年目の今
年は、学年の3分の2近く、70数名の学生が希望し
ていた。他学部とちがい、福山まで出かけ、肉体的
にも精神的にも、また経済的にもかなりきびしい2
週間のはずである。ふだんの教室におけるような受
身の姿勢ではつとまらないだろう。去年も途中で実
習を放棄した学生が1人いた。教師の卵の登校拒否。
こうした無責任な行為が、時間割を準備し事前の指
導をされてきた附属の先生方や授業を受ける生徒た
ちにどれほど多くの迷惑を与えるか。実習生諸君の
自覚とお互いの協力が望まれるわけである。

* * *

今年の実習もどうやら無事に終えることができた。
福山附属校の先生方の熱心な御指導のおかげである
ことはいまでもない。「わずかな期間であったけれ
ど、ここでの生徒たちとの出会いがきっと将来の

きみたちの生活の中でよい思い出として残るだろう」
と言われた珠山副校長のことばが私の心にひびいた。
そして、実習生代表としてつらかったけれども充実
した2週間の経験を若者らしく率直に語った平岡君
(環境科学コース)の挨拶も私にはうれしかった。
私の参観した国語の授業でも、例年になくしっかり
した実践を見ることができた。指導に当たられた先
生方が本当に親身になって授業案の相談などにあず
かられたということが、あとの批評会でもよくわか
った。附属の先生方がどれほど多くの仕事をかかえ
ておられるか、その上に、多くの実習生を受け入れ
ることがいかに過重な負担を強いるものであるか、
そういう事情を承知している私には、どのように感
謝の気持ちを表したらよいかわからない。

* * *

実習が無事に終わったとはいえ、問題がなかった
わけではない。たとえば、学生諸君の場合、総合科
学部が教員養成専門の学部でないだけに、教職単位
などの履修でもより一層自覚的主体的でなければなら
ないのではないかということ、各教科の専門の学
力をもっと身につけなければならぬということなど
が課題としてあるだろう。また、私たちの場合、教

育実習のための条件整備を全学的に真剣に考えなくてはならぬということがあるだろう。今年も4か所の宿舎に分宿してもらったのだが、それぞれの宿舎の条件はいろいろな点でちがっていたし、実習生諸君に多くの物質的・精神的負担をかける結果になってしまった。

さまざまな困難と障害が、附属校の御厚意と実習生諸君の協力によって切り抜けて来ている現状を、大学全体の知恵と力で改善してほしいと強く訴え、お世話下さった方々に重ねてお礼を申し上げて短い筆を擱く。

地域文化教授・教免委員長 深萱和男

「教育実習」を参観して

福山までの1時間、新幹線にゆられながら、私は憂うつであった。それは、その日、早起きさせられたための寝不足と、それがための朝食抜きのせいばかりではない。ふだん、大学の教室で精彩に欠け、「質問は……」といっても無気力な対応の多いわが学生たちが、立場をかえて「先生」となり、教壇で何を語っているか、生気にみちた高校生たちの攻勢に堪えられているか、それが心配だったからである。福山駅で落ち合ったドイツ語の小野先生とも、そんなことを語ったような記憶がある。

しかし、この私の杞憂は授業参観に臨むにおよんで、雲散してしまった。いや、正確には、私のこのちよっぴりいじわるな「期待」は裏切られてしまった。教室における彼らの、そして彼女らの授業ぶりは、実に堂々としており、これが私の教室でいつもおどおどしている学生であるのか、別人ではないのか、そう思わざるを得ないほど明るく活気にみち、立派だったからである。私は歴史、政経にかぎって10人ほどの授業を見たのであるが、そのいずれをとっても、一見、文句のつけようのないものであった。

もちろん、話し下手もあって聞き手に十分その意が伝わっていないものがあったわけではないし（その証拠に生徒の何人かが眠ったり、他教科の教科書を開いていた）、生徒の反応におかまいなく、「教授然」として1人でましく立っているものもあった。また、板書に大きく誤字を書いているものもいた。だが、それとて懸命でまじめであったこと、何よりも個性的である点で、好感のもてるものばかりであった。誤字の彼女など、生徒にそれを指摘されてもこれをユーモラスに受けとめ、教室中を笑わ

せたりしたほどである。

「総合科学部の学生は他学部にくらべてすなおですし、個性的ですよ」——受入れ校の社会科の先生が、そういう評価を与えてくれたことも、私にはうれしかった。「みんな変わったなあ」、そう思わざるを得なかった。放課後の、受入れ校の先生を加えての反省会において、私が述べた感想もこれに尽きていたかと思う。

そして、学生諸君をして「変らせたもの」、それは子供たち、福山の生徒たちであろう。いうまでもなく、教育という仕事は、単にある教科をおしえる、知識を与えること以上に、初・中等段階ですぐれて人格的なものが問題になる。学生諸君についていえば、教壇に立ったその瞬間において自らの人間性がすべてそこに表出されるものであり、その人間がダメな場合、生徒の信頼をかちとることは絶対にできない。したがって、緊張せざるを得ず、勉強せざるを得ず、人間としての鍛錬にはげまざるを得ず、変らざるを得ないのであって、そうでなければ、教師になる資格はない。わずか2週間の経験ではあったが、教生諸君は意識するとしなにかかわらず、それを体得したのであろう。そのことが、彼らを「変らせた」のであった。甘えと怠惰のなかで生きてきた彼らにとって、これほどのすばらしい経験はなかったのではないか、私はそう思う。

それだけに、もう一つの感想は、何といっても学力の不足、専門性の欠如が露呈していた点であって、今後、教職に就くか否かを問わず、もっともっと勉強してほしいことであった。社会科に例をとれば、ごく基本の歴史事実を知らぬ学生のいかに多かったことか、一時間、二時間の授業ではそれはごまかせても、やがて「先生」の実力がすぐにわかってしまう。そういう教師であっては困るのである。「大学で習わなかったから」、そういった学生がいたが、それは理屈にもならない。しっかりしてほしいと思う。これは私の専門になるが、中国に「紅と専の統一」という言葉がある。この意味は、専門家としてすぐれている者は、同時に人間としても立派であることをさす。いいかえれば、中途半端な知識しかもたぬ者は、人間としても中途半端だということである。重ねていうが、心してほしい。

そして、このことが重要だと思うのは、いま教育界は荒廃しているといわれ、中学校ですら校内暴力がはびこっているという。しかし、真に学力のある教師、人間としてすぐれた教師には、子供は敬服と

そすれ、そのような挙にでないものである。

平穩で、秀才揃い、しかも好意的に遇してくれた付属福山の経験にゆめゆめおどってはならないであろう。

アジア研究教授・教免委員 小林文男

4年生の方・実習どうでしたか？

教育実習を終えて（英語）

—— 未来の教育実習生のために ——

教員となる人にとっては、来春赴任後すぐに自分一人で責任を負わねばならない領域が与えられることもあって、教育実習は貴重な研修期間であると思います。それだけに、教育実習期間をいかに過ごすかは大きな意味を持っていると言えるでしょう。また、教育実習は自分の教師としての適性を問うのに最良の機会であり、最後の機会であるように思われます。

それでは僕が教育実習を通じて感じたこと、福山の先生方に言われたことについて書いてみます。

第一に、一生懸命やること。これは教育実習の説明会の時に言われたことですが、やはり教えるという体験が初めてであり、何もわからない者にとっては、一生懸命やるのが大切だと思います。手を抜こうと思えば出来る部分もあるでしょうが、そうしたら生徒は、教育実習の犠牲者となってしまいうように思います。

第二に、何にでも挑戦する気持ちで臨むこと。教師としての自分の適性を確かめる上で、教育のより多くの場に関わっていくことが大切ではないかと思えます。勿論、実習生である以上制約はあるので、指導教官と相談した上でということになりますが、私たちの実習の場となった広島大学附属福山中・高等学校には、私達が福山に行った時に既に教育学部福山分校からの教生の人達がおられて、私達はあまりクラス活動に参加出来ませんでした。出来るだけ参加していくようにしたら良いと思います。先生方も非常に協力して下さるので、後輩の人達には恐れずに頑張ってもらいたいと思います。またクラブ活動をのぞいてみるのもいい体験だと思います。また授業に関して言えば、より多くの授業参観・観察することを勧めます。実際に教員になれば、他の先生方の授業を見る機会はずっと多いわけですから。

第三に、自分なりの授業を行なっていったらいいと思います。勿論、基本に忠実にやることは大切だ

ろうが、こうしてみたい、あおしてみたい、といったものがあれば、それを自分の授業でやってみて、生徒につけてみたらどうでしょう。

第四には相談してみることに。わからないのは恥ずかしいことではないのであって、どんどん指導教官に相談していくことが大切だと思います。また総合科学部生の場合、旅館等に宿泊したのですが、費用等問題はありましたが、皆で話し合う時間がもてたことが良かったようです。

教材研究にかなり時間を費やした二週間であり、生徒と接触する場をもっと多くもたら良いといったような反省もありますが、大変良い経験となりました。

これから教育実習に行く人達も、教育実習の二週間は、学生であることを忘れて、教師なのだという自覚をもって教育実習に取り組んで、二週間を貴重な研修とすべく頑張ってもらいたいと思います。

福山で指導して下さった先生方に感謝の意を表して、私の実習を終えてのレポートを締めくくりたいと思います。

52年度生 地域文化 村松 誠

教育実習を終えて（理科）

教育実習を終えてから、5カ月が過ぎてしまい、当時の感動も薄れている今、この原稿を書くのは、たいへんつらいことです。

教育実習の前は、果たして生徒に理解してもらえようか？という不安のため、しばらくは落ち着かない日々を過ごしていました。しかし、教師でもない私が、はじめっからうまく教えられるわけがない、とにかく、実際に授業するという事は、どういうことなのかを体験してこよう、というような気持ちで実習に臨みました。

私たち生物を実習する者は、12人もいて、始まっ



た次の日から実習授業を行なわなければならない人がありました。1人3時限づつ受け持ちましたが、実習期間中は、ほとんどの生物の授業が実習生による授業となってしまう、生徒のみなさんや、指導して下さった先生方にはずいぶん御迷惑をおかけしたのではないかと思います。授業参観も、指導教官の授業が参観できたのは最初の日の1時限だけで、あとは、すべて実習生の授業の参観ということになってしまいました。

授業の流れがよくわからないまま、実習授業を行なうことになり、とにかく学校から渡された資料を参考にしながら、指導案作りにとりかかりました。私が一番始めに実習授業を行なったのは、第3日目ということで、前に実習授業をした人たちの反省などを参考にしながら指導案を作り、それでも不十分のような気がして、持参した参考書をひっくり返したりして、前日はなかなか眠ることができませんでした。いよいよ授業をするために教壇に立つと、40人余りの生徒の目が一勢にこちらを向き、思わず出席をとる声に力がいりました。大勢の人の前でしゃべることになれているので、思ったよりあがらずに授業ができました。

実習授業が終わると反省会があります。みんな自分の事は棚に上げて、鋭い意見を出し合います。11人がいろいろな事を違った視点から意見を出すので、1時間の授業でその倍の時間が反省会にかかるということもありました。また、意見が対立することもありました。この反省会では、指導教官の先生方から、教師という職業の厳しさ、人を教えることのむずかしさ、勉強のし方、生徒のこと、板書のこと、言葉のことなど、いろいろと教えていただきました。

このようにして授業と反省会を繰り返していくうちに、みんな、自分の勉強不足と責任の重さを悟り、指導案を作るための時間がだんだん長くなっていきました。下調べはいくらしても足りないようで、徹夜で指導案を書いたという人もたくさんいます。2週間の実習期間が終わるころには、疲れ果てて、やつれてしまったのは、私だけではないでしょう。

今思えば、あの2週間ほど勉強したことは大学にはいって以来絶えてなかったと思います。人を教えるためには、教える内容をまず自分で勉強し理解しておかなければならないので、自分の知識不足を認識するとともに良い機会かもしれません。そうして、授業するということが、自分の知識をただ放出するのではなくて、相手に理解してもらえるような形で、

導くことだということを学びました。

教師の責任の重さ、厳しさ、むずかしさがわかった今では、それだけやりがいのあるこの職業につきたいと思う私です。この2週間の貴重な体験を生かして、次の世代を担う子供たちに接したいと思います。

それにしても不安になるのは、昨今の学校内での暴力事件が新聞に出ていることです。それも、生徒の教師に対する暴力事件が……。

52年度生 環境科学 品川博美

我つかの間のエンターティナーとなりて?!

(社会)

教育実習というと、もう、いろんなうわさが流れていると思います。“徹夜の予習”ならぬ“毎晩の酒盛り”“福山歓楽街探索”予習と言えば“生徒に受けるためにダジャレをどこで入れるかの研究”などなど。僕はそれらを否定するつもりは毛頭ありません。けれども、今日は、教壇に立っていた時の真摯な気持ちに帰って、書いてみたいと思います。

まず、教壇に初めて立つと、思うもんです。「見つめられてるウ」って。ここは一番、余裕のあるところを見せねばいけません。名簿を見ながら、1人1人のつら構えを確かめます。けれども、名字が読めないというのはなんとも気まずいもんです。

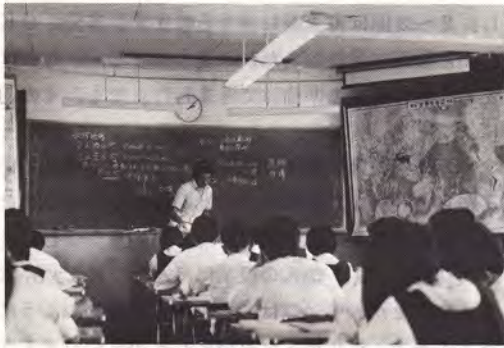
僕が授業した6年生(高3)の地理というのは、選択の関係で男ばかり。しかも受験に地理をとる奴なんてほとんどいなくて、いわば「ゆとりの時間」。だいたい初めっからやる気のなさそうなのが多い。返事だってロクにしてくれやしない。やる気のありそうなのは世界史の問題集を持ってきているんだから、ハッキリしたものだ。なんとか、デレツとしている奴らが、1人のこらず身乗り出してくるような授業をと、闘志を燃やします。

昨夜来の予習とゼミでの蓄積(?)のおかげで、理詰めの授業が展開しだすと、さすが、エリート附属のいい子ちゃん。大半の生徒は聴くだけ聴いてくれます。しかし、中には気になる奴というのがいるもので、奴らは僕の授業なんか聴いてやしません。どんな人間やろかこいつは。おもしろい話するんやろか、どないやろかと教生の値ぶみをやるとるんですなあ、実に。まゝそういう奴の方が個性的というか、はみだしというか、おもしろそうなのが多いようです。

2回目の授業の時は、教生の授業を聴かされる

「生徒は被害者だ」というので、とにかく退屈させないためにと頭をひねりました。都市では野ぐそができないということが、都市問題の本質だ、とぶち上げ、野ぐその体験を話すこと10分、この時ばかりは、全員がちゃんと顔を上げてくれたことを記憶しております。

男ばかりのクラスはそれでも良かったんですが、女子のいるクラスでは、どうも緊張してしまいました。氷河地形の説明を、生活に身近な例、具体的でおもしろい例をと思っていっしょうけんめいやるんですが、こっちがマジになるほど何故か嘲笑のうづに包まれました。



最後の授業などは、予習してきたこと、エピソードなどなど、ありっけを話そうとするものですから、1人で演説しまくって、教壇の上をあっちへスタスタ、生徒の間へスタコラ、そんな落ちつかなさの中でしゃべりまくりました。おそらくナルシズム的な快感に酔っていたらと思うます。

とまあ、しんどいのは授業案作りでありまして、生徒にとっておもしろい授業は、きっと自分も楽しくなくっちゃできないだろうと思います。などとは言いながらも、こんな授業で科学的な社会認識などというものが少しでも養われるのかと考えると、自責の念にかられます。

例年、附属福山では「情熱のみの総科」と皮肉られておるそうです。けれども、「教生がそんなにうまい授業ができるわけないし、そんなことされたら立場がなくなる」という先生の言葉もあるように、福山の生徒たちはきっと「情熱の総科」にこそ期待していただろうと思っています。

最後にヘタなシャレにも笑ってくれた生徒のみなさんに、感謝の意を表するものです。

52年度生 社会文化 原田邦彦

Tschüß, 教育実習 / (数学)

昭和55年度の総合科学部対象の教育実習は、6月9日から21日まで附属福山中・高等学校で行なわれた、数学科教育実習生(以下“教生”)総員17名中13名が総科生で、他は附属出身の他大学生であった。このときのことを数学科を中心に、筆者の独断を交えて回想してみようと思う。

まず教育実習前に考えたことは、授業を通して、総合科学部としての特徴を出せるか?ということであった。理工学部で数学を専攻して来た教生には、数学的厳密性・論理の美しい展開といった点ではどうひいきめに見ても歯が立たない。しかし、われわれには応用面の実例として、統計理論・計算機・情報理論・量子力学・統計力学・電磁気学&c.から引用できる特性がある。最初は、この点を押し出せばいいだろうと思っていたのだが、実際には相手が中高生であるための制約があって、概念的なことは導入できても応用数学の妙味を味わってもらうことは不可能であった。そこで私は自分が同年令の頃、数学の中に発見したあのキラキラした宝石にも似た美しさ、総科で学んだときに見つけた驚くべき関係を十分に盛りこんだ授業で実習に臨むことにした。

数学科教生のうち9人と英語科・国語科の教生は「ひきの会館」に宿泊したのだが、後で考えると、このことは非常に有難くもあり、また大変不便であった。人間というものには極限状況においてその人間性が明瞭に現れるものらしい。下校時から始まる教科の予習と指導案作成の過程には、まさにその感があった。予習といっても、内容の深い理解と要約・問題のあらゆる角度からの解答の検討・内容に関するdiskutierenが必要であり、さらに無理のない流れと要点を押さえた「指導案」の作成があった。このとき頼りにできるのは、同じ教科のグループの者だけであったので、2週間を平均睡眠4時間で乗り切れたときほど、Freundschaftの有難さを味わったことはなかった。集団生活をして不便だと思ったのは、授業時間の都合で普通どおりに睡眠をとれる者の寝顔を見るとときであった。

こうして出来上がった指導案を持って登校し、指導教官の検閲を通れば、授業となるのである。授業は毎回毎回ひどく緊張した。それもそのはずで、指導案もうろ覚え、睡眠不足で頭はすっきりしておらず、最後列では観察録をもった教生と指導教官が見